

北陸大学図書館報

NO.58



◆◆ 第24回読書感想文・第6回書評コンクールと ビブリオトークを終わって ◆◆

図書館長・薬学部教授

大黒 徹

はじめに、令和6年能登半島地震から1年が過ぎましたが、地震復興さなかでの豪雨災害もあり、再び被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

さて、このたび第24回読書感想文・第6回書評コンクールが実施され、最終的に読書感想文180編、書評48編の応募作品がありました。コンクールに参加してくれた学生の皆さんと本学教員・職員・関係者の方々に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。厳正なる審査の結果、最優秀賞1名（読書感想文）、優秀賞6名（読書感想文5名、書評1名）、佳作8名（読書感想文7名、書評1名）、努力賞9名（読書感想文5名、書評4名）の計24名を、各学部1名ずつの図書館委員4名と学術情報課1名の計5名で選出させていただきました。次年度もより多くの作品が寄せられることを期待しております。

皆さん一人ひとりの作品を読ませていただき、読書で疑似体験することで得た心情・思考を自分の文字で発信することが如何に大切かを改めて認識しました。表彰式・ビブリオトークを令和6年12月20日（金）図書館4階ソフィアルームで開催することができました。ビブリオトークでは、自分自身の生き方を見つめ直すような作品、家族愛、友情と愛情、悲しみと憎しみ、科学とヒューマニズム、人生の哀歓など様々なジャンルの本が紹介されました。今回のビブリオトークを通じて、読書をして心を揺すぶられたり、自分の経験に重ねて共感したりといったことの重要性を再認識しました。

インターネットで簡単に情報が手に入るようになり、さらに生成AIや人工知能など人が考えなくても文章が作成できる時代が到来していますが、人間にしかできないことを鍛えることが本当に重要になってきたと改めて実感した次第です。

最後に、作品の受理や集計に関わってくださった学術情報課職員の皆様、そして応募作品を真摯に評価してくださった審査委員の皆様にご感謝いたします。ありがとうございました。

◆◆ 第24回読書感想文・第6回書評コンクール表彰式 およびビブリオトークを開催しました◆◆

令和6年12月20日(金)、第24回読書感想文・第6回書評コンクール表彰式が行われました。

最優秀賞・優秀賞・佳作受賞の学生が参加し、和気あいあいとした雰囲気の中、互いに受賞を喜び合いながらの式となりました。

ビブリオトークでは、最優秀賞・優秀賞受賞の学生が自分の選んだ本について、その本を読んだきっかけや本の内容などを語りました。話題の本であったり、以前読んで心に残った本であったりと選書の理由は様々でしたが、参加者は熱心に聞き入っていました。質問も飛び交い、今後の読書の幅を広げるきっかけとなりました。



入賞者が読んだ本は、本館（太陽が丘）に所蔵していますので、是非、読んでみてください。



第24回読書感想文・第6回書評コンクール 審査結果発表

応募作品228（読書感想文180・書評48）編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞（読書感想文の部）

宮崎琴音さん 我が学びは何のため (薬) 6年

優秀賞（読書感想文の部）

越田開成さん あなたに敬意を、彼らに花を。 (薬) 6年

中川さや華さん 傲慢な善良の私を生きる～本当の自分(真実)を探す旅～ (薬) 5年

千田一乃さん 一瞬一瞬を大切にすること (薬) 1年

森 瑞樹さん 自分の家族の物語 (薬) 1年

内江 健さん 『アルジャーノンに花束を』を読んで (医) 1年

優秀賞（書評の部）

川口万結さん 同鳴 (国) 1年

佳作（読書感想文の部）

大廣桃花さん 犬と人生 (薬) 1年

岡本明花さん メロスという男 (薬) 1年

高出咲里さん 嘘と真実から学ぶこと (薬) 1年

手塚心楼さん 医療現場から学ぶこと (薬) 1年

宮坂朋佳さん 『アトム的心脏』を読んで (薬) 1年

平まつりさん 『リーダーは話し方が9割』を読んだ感想 (経) 3年

榎原響輝さん 人生を変えてくれた『永遠の0』 (経) 1年

佳作（書評の部）

杉谷日向さん 10年の取材が描く挑戦と成長 (経) 1年

努力賞（読書感想文の部）

武田さつきさん そこに愛はあるんか (薬) 6年

要 和さん 大切な人たちと健康に過ごすために (薬) 3年

石井麻尋さん 幸せとは何か (薬) 2年

松永莉奈さん 『羊と鋼の森』を読んで (薬) 1年

上田蒼依さん 心と体の関係 (医) 1年

努力賞（書評の部）

王 楽濱さん 国際関係入門—奥深さと面白さ (国) 3年

入江恋々茄さん 西洋も羨む日本とは (国) 2年

田中竣己さん 嫌われることの意味 (医) 1年

山本琉璃さん 母と子 (医) 1年

* (薬) は薬学部、(経) は経済経営学部、(国) は国際コミュニケーション学部、(医) は医療保健学部です。



最優秀賞（読書感想文の部）



我が学びは何のため

薬学部 薬学科 6年次生 宮崎 琴音

書名 現代語訳 論語と算盤
著者 渋沢 栄一
訳者 守屋 淳
出版社 筑摩書房

ウイルスのごとく寄生し、金銭的な心配を親に丸投げしていた生活は大学生になって一変した。自身の目標に向けお金を工面する必要ができたことを契機に、お金や将来に対する認識の甘さを痛感した私は、書店と図書館に向きお金にまつわる本を片っ端から読み漁った。大抵の本は例えば税金や社会保障の知識であったり資産運用の話であったりと、一言でいえば「個人の資産形成」や「生活する上での常識」に関する内容だった。そんな中で一風変わった本があった。それが『論語と算盤』である。算盤が何を指すのかもピンとこず、さらには論語ときた。「論語ってあの古典で習った論語だよな…」と興味を引いた。このタイトルこそがまさに本書の内容と著者である渋沢栄一の人生を通して貫いた信念を言い表す代名詞であったことに気づくのはページをめくり始めてそう遅くなかった。

この『論語と算盤』という本は、渋沢栄一を慕う人々が集ってできた竜門社という組織が発刊した機関誌に掲載されていた栄一の講演の口述筆記をテーマごとに編集したものである。渋沢は、農家に生まれ、家業を手伝う中で『論語』をはじめとした学問を学んでいく。武士を志し、尊王攘夷の志士として活動を始めるも頓挫し、縁あって一橋家の家来となって慶喜に仕え、フランスの視察団に加わって欧州の技術や実情を目にすることになる。帰国した時には大政奉還により幕府はなく、「商法会所」を静岡に設立し、明治政府から招かれ大蔵省で国づくりに関わった。その後大蔵省を辞して「第一国立銀行」の総監となり、これを主としながら株式会社や大学などの設立を行った人物である。設立した会社は 481 社、慈善事業への関与は 500 を超えた。まさに時代の過渡期に生き、日本の産業の基盤を作った人物であると言える。

特に商売を振興させる必要性を感じていた渋沢は、商人には不要とされていた学問が道徳として必要であると考えた。商人への転身を金目的で賤しいと友人からも理解が得られない中で、『論語』による経済活動で一生を貫こうと決意する。さらには、儒教を最も発達させた朱子が活躍した宋王朝末期の実情が政治は乱れ、兵力も弱かったことから、理論と現実はお互いに一緒になって成長していかないと本当の発展には結びつかないと「現実と学問の調和」についても考えていた。このような姿から私は渋沢が学問に対して信頼と敬意を寄せていること、そしてそれを現実に落とし込んでこそ意味があるのだという信念を感じた。特に学問を現実の実業で役立てようとする柔軟な発想に感銘を受け、読みながら今の自分と照らし合わせて考えていた。

私が在籍する薬学部は6年間の教育課程があり、1,2年次は有機化学や生化学といった「学問」にあたる内容を学び、3年次からは調剤学や法規など「実務」に近い内容が加わって5年次には薬局と病院で5カ月にわたって実務実習を行う。その傍ら、卒業研究を行いながら6年次を迎える。実務実習は明らかに「仕事」として学んだ知識をどう役立てるのか学ぶ場であり、研究は「新たな知」を生み出すプロセスを経験することで論理的思考を身に付けようとする「学問」に近い内容である。

臨床現場で聞いた話の中で印象に残っていることがある。保険薬局の実習で「学会参加への敷居の高さや学術的な知識のアップデート機会が得られにくい」といった学び続けることの難しさを聞いた。一方で病院実習では「経済・経営的な視点を自分事として持ちにくい」という問題点も聞いた。もちろん個人の資質や、施設ごとに特色や傾向が異なっていることは前提として考えるべきであると思うが、このような傾向があるのは想像に難くない。私自身は学ぶことが好きで薬学部を志したが、社会人として働くことを考えると「学術的側面と経済的側面」のバランス感覚をもっていることが重要なのではないかと考えていた。そんなこともあって、「実」を重んじながらも、事業を行う上で利益追求に傾倒することなく学問を指針として活用した渋沢の発想がとても印象に残った。何のための学問であり、何のための事業なのかを考え、大義のために手段として活用することの大切さを、『論語と算盤』で渋沢が人生を賭して示してくれたように思う。

本書には人生の羅針盤として含蓄ある言葉も多い。私は自身の興味の移ろいややすさや飽き性を自覚しており欠点

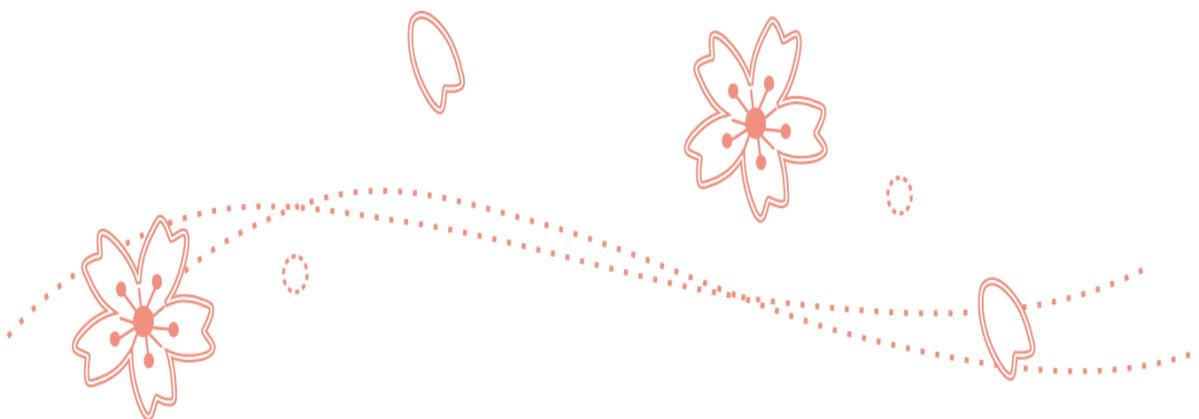
だと思っていた。しかし、渋沢も志を立てるのには苦労したようだ。『これなら、どこから見ても一生を貫いてやることができる』という確かな見込みが立ったところで、初めてその方針を確定するのがよい。」と述べる。根幹となる大きな志の次に立てる小さな志については移り変わりやすい性質を指摘し、「一生涯を通じて、『大きな志』からはみ出さない範囲の中で工夫する」とあった。自分の分をよくとらえ、自身に最も即した大きな方針を立てて進んでいくことの重要性を知ることができた。

渋沢がここまでの偉業を成し遂げたのは誠実な努力の積み重ねと、『論語』の思想に基づいた純粋に国の発展を願う確固たる行動指針によるものだと本を通して知ることができた。学問を現実世界に役立てようとする渋沢の姿は現代に生きる私にとっても大いに学びになったと思う。もうじき6年間の薬学部全過程を修了し、社会へ出る。これまで積んできた学びは「興味と好奇心を満たすため」そして「外部からの賞賛」といった自分本位なもの強く結びついていてと思う一方で、自分を成長させられたのだから良かったと私は捉えている。ここからはいよいよ学んできたことを発揮していく段階になる。今年の7月からは新紙幣の新たな顔となった渋沢栄一。一万円札をふと見た際には彼の柔軟な発想と中庸的で誠実な態度、大胆な行動力を思い返し、私は私なりの志を立てて社会に貢献していきたいと思う。

審査委員講評 **大黒 徹** (図書館長・薬学部教授)

大学生としてお金や将来に対する認識の甘さを痛感し、自身の目標に向けお金の活きた使い道に興味湧き、お金に関する本を読もうと思ったと本作品では書き始められている。それで目に留まったのが渋沢栄一の「論語と算盤」。新一万円札の新たな顔である渋沢の著書である。渋沢が考えていた『論語』による経済活動、すなわち学問を現実の実業で役立てるという発想に感銘を受け、学術的側面と経済との両面のバランスの重要性を痛感したと書き記している。渋沢の考えと、彼女自身の「講義等で学んだ学問的な面」と「薬局や病院実習での実務と経済・経営的な視点」からの実体験とを照らし合わせることで共通点を見出し共感することができたまとめている。調和のとれた社会を保つ上でバランス感覚は特に重要である。

今現在、世界は大きく変化しようとしている。経済や己の利益優先の考え方は当然のことではあるが他者に対する思いやりや道徳的な行動が伴う必要がある。受賞者は社会に貢献するため高い志を持って医療の現場へ踏み出そうとしていると選者は実感した。



優秀賞（読書感想文の部）



あなたに敬意を、彼らに花を。

薬学部 薬学科 6年次生 越田 開成

書名 アルジャーノンに花束を
著者 ダニエル・キイス
訳者 小尾 芙佐
出版社 早川書房

『メメント・モリ』という言葉がある。意味は『死を忘れることなかれ』だ。昔、勝利に酔いしれる兵士たちの傲慢をたしなめるために、戦場で使われていたらしい。私がこの言葉を知ったのは15の時、まるで死神のように感じられた。見たくもない己が終着点を、終わりを、臉を無理やりこじ開けられ見せつけられているように思えたのだ。当時の私は引きこもりで、これから先の人生に一切の希望を持たず、諦観だけを抱いていた。決意や情熱、守りたいものもなく、惰性で生きていたくせに、ひどく終わりが怖かった。いや、命しか持ちうるものがなかったからこそ、そう思えたのかもしれない。チャーリーとアルジャーノンに初めて出逢ったのは、そうした諦観の日々から数年後のことだったと思う。己が使命を定め、決意と情熱をこそ尊んでいた時期だ。

「アルジャーノンに花束を」の主人公、チャーリー・ゴードンは、32歳にして知的障害を持つ青年だ。彼のIQは68で、多くのことがわからない。しかし、チャーリーは暖かさ、率直さ、親切さといった、人に好まれる特徴を多く備えていた。この物語は、革新的理論に基づいた実験的手術を受けたチャーリーの「けえかほおこく」を通して語られる。最初、誤字や脱字だらけだったチャーリーの「けえかほおこく」は、手術を受けることで「経過報告」へと変わり、誤字脱字は消え、難解な表現や比喻が増えていき、知能の向上が文章を通して伝わってくる。

物語の前半で、チャーリーは知能の向上を夢見ていた。パン屋で働く同僚たちの話を理解し、自分も輪に加わりたかった。しかし、知能の向上は思わぬ結果を彼にもたらす。知能の向上により、周囲の不正や悪意に気付くようになった。友だと思っていた同僚たちは、その実、彼のことを嘲笑っていた。「いろいろわかるようになった」ことで苦しむようになってしまったのだ。物語が進むにつれ、チャーリーは「人為的に誘発された知能は、その増大量に比例する速度で低下する」ことを知る。ここから彼は知能が低下していく恐怖と闘いながらも、いくつかの気づきを得る。私が特に印象深かったのは、『人間的な愛情の大切さ』と『使命』である。

終盤で彼はこう語っている。「人間的な愛情の裏打ちのない知能や教育なんてのはなんの値打ちもないってことをです」と。チャーリーは知能が低かった時に多くの友がいた。友はチャーリーを嘲笑っていたが、彼らはチャーリーに何かをしてあげようとしていたし、チャーリーも何かをしてあげようとしていた。しかし、知能が向上したチャーリーは、知識を求めるばかりに、他人からの愛情を排除し、「ぼくに何かをしてくれようという友達はどこにもいないし、ぼくが何かをしてやろうという友達もいない」という状態に陥った。ここでチャーリーは『人間的な愛情の大切さ』に気付いたのだ。

また、知能が低下していくことに怯えながらも、チャーリーは己の『使命』を定めていた。知能が向上したチャーリーが、過去の自分で、いずれ訪れる自分、知能の低いチャーリーに対して言い放った言葉がある。「おれはあきらめないぞ——だれがなんと思おうが、いかに孤独であろうが、彼らにくれたものを守って、世界のため、おまえのような人たちのために、貢献したいんだ」。

物語の最期、チャーリーは「いろいろわからなくなった」けれど、最後の一文、「ついしん。どおかついでがあったらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそえてやてください。」にて、チャーリーが感じた感情や経験は消え去っていないとわかる。アルジャーノンはチャーリーより先に、チャーリーと同じ手術を受けた実験用ネズミである。チャーリーは、知能が低下する前から、物語途中で死んだアルジャーノンに墓を作り、花を供えていた。そして、チャーリーは知能が低下してもアルジャーノンに花を供えてほしいと願ったのだ。アルジャーノンは、物語を通してチャーリーの運命を暗示していた。描かれてはいないが、チャーリーもアルジャーノンと似た最期を迎えるだろう。

この物語は、チャーリーの人生を描きつつ、すべての人の一生を語っていたように思う。多くの人が数十年かけて得るような経験をチャーリーは8か月という短い期間で経験した。チャーリーが得た経験は、私がこれまで経験したもの、もしくはこれから経験していくものであろう。そして、彼らと同じように、私もいずれ最期を迎える。この本を初めて読んだ頃、私は己の『使命』を堅く定めていた。しかし、現在では、幾人もの身近な人の突然の死

に触れたことで、己が定めた『使命』は薄れ迷路にとらわれてしまっていた。けれど、改めてチャーリーの物語に触れたことで、迷路から抜け出し、己が定めた使命『誰かの最悪な時に寄り添うこと』をはっきりと思い出せた。

『メメント・モリ』——昔はひどく恐ろしかった。だが、今は『願い』だろうか。終わりはいつかくる。だからこそ、終わりが来ることを忘れず、『イマ』を生きるべきだ、生きてほしいという願いだと思える。中世のキリスト教修道院の修道士たちは『メメント・モリ』と一方が言うと、『カルペ・ディエム』と返していた。『カルペ・ディエム』の意味は『一日の花を摘め』。つまり、『死を忘れるなかれ』『今を生きろ』となる。

『イマ』、鼓動の中に決意と情熱を秘め、人間的な愛情と使命を抱き、敬意と歩む。この足が、この鼓動が、この決意が、この情熱が、止むまで。あなたに、『イマ』を生きるあなた方に敬意を。彼らに、鼓動が止んだ先人たちに花を。そして、いつの日か私の鼓動が止まった時にも、願わくば、花を。

審査委員講評 武本 眞清 (薬学部准教授)

越田さんの感想文は、読んでいてひりつく感覚を覚える。読書感想文はある程度の自己開示を伴うものだが、彼のそれは表皮を通り越して真皮に達しているのではと思わせる鋭さと深さであり、読み手は彼が投げってくるむきだしの魂を受け取らなくてはならない。それゆえ、こんな素手で触ったらめっちゃ痛いんちゃう？とこちらのミラーニューロンを刺激してくるのだ。

さて、「アルジャーノンに花束を」を読んで越田さんが胸に刻んだ「人間的な愛情の大切さ」は、普遍的な人生訓である。「あらゆる知識に通じていようと、愛がなければ無に等しい」と使徒パウロが手紙に書いた二千年前の言葉は、今でも結婚式などでよく読まれる一節である。そして人間が知識やテクノロジーに溺れれば溺れるほど、つかむ藁の存在価値が高まるとすれば、本作が執筆された70年前より現代にこそ、求められる一冊といえるのかもしれない。

優秀賞（読書感想文の部）

傲慢な善良の私を生きる

～本当の自分(真実)を探す旅～

薬学部 薬学科 5年次生

中川 さや華



書名 傲慢と善良
著者 辻村 深月
出版社 朝日新聞出版

もういい子のふりは疲れた。本書「傲慢と善良」を手にとったのは、自分を見つめ直すきっかけを求めていたからだ。22年間、必死に善良を演じてきた私だが、周囲の人々が私に期待を寄せるほど、私の中の傲慢さは強まり、時には一般的な悪人よりも私を黒く暗く染め上げる。試験前によく見る「空から落ちる夢」。着地が成功すれば試験も成績も良好、逆に派手に失敗すれば成績表にはFがつく。実はこのFがFAKEのFで、削ったらSが出てくると期待したことがある人は私だけではないだろう。そんなどうでもいいことを考えながら日々を過ごしている中、ある映画タイトルが目をついた。「傲慢と善良」。推しの藤ヶ谷太輔が主演だということで、「推しは推せるうちに推せ」という言葉に従い、すぐにその映画を見に行っただ。

しかし、映画を観るにつれて気分が悪くなる。ヒロインの行動が私自身を映し出しているようで、痛々しさと共感的羞恥から目を伏せたくなる。彼女は「なぜ私のことがわからないの？」と心の内で叫ぶ。一瞬は感情移入するが自分は違うと思いたい気持ちが交錯する。だが、この気持ちから逃げてはいけない。就職や進路について決断する時期にある自分が、今、一番向き合わなければならない問題だと思った。映画で描かれていない描写からも深く推察したく思い、表紙のヒロインの何かに縋りたげな表情に同族嫌悪を抱きながらも、自らの求める答えのために

この本を手を取った。

物語は、自らの価値観でしか物事を見られない傲慢さと、他人の言うことを素直に聞き、誰かに決断を委ねてしまう善良さが矛盾なく同じ人間の中に存在する現代社会を舞台とした辻村深月先生の鋭い着眼点が描かれている。

「進学、就職、恋愛、友情、結婚。あらゆる選択を決断してきたのは本当に「私自身」なのか？」

婚活を進める中で、その疑問を持ち始めたヒロインの真実(マミ)は、本物の自分と向き合うために忽然と姿を消した。鈍感でありながら優しくもある主人公・架(カケル)が、婚約者の真実(マミ)の居場所を探る中で、彼女がただの善良を演じていたことが浮き彫りになる。その先に待つのはハッピーエンドか、バッドエンドか。ぜひ自らの目で確かめてほしい。

本書を読み終えた後、周囲の環境が人生に与える影響に改めて気づかされた。私自身も、周りの圧力から善良を演じる真実(マミ)に共感を覚えた。親や周囲の期待に応えなければならないという気持ちは、安定を求める一方で本当にやりたいこととの間に隔たりを生んでしまう。だからこそ、善良を演じるとこか私に似た真実(マミ)を肯定してあげたかった。

この夏、実務実習を通じて、世の中には自分の思っていた以上に多様な人がいることを知った。最初は大人達の未熟さに失望したが、「こうでなければならない」という私の思いは、周りの圧力から形成された単なる理想に過ぎないと気づいた。また、一方で尊敬せざるを得ない大人も存在した。彼らは周囲に認められるまで自慢せず、自然に人を惹きつけ、信仰させる力を持っている。羨ましかった。なぜなら、患者のことをどれだけ考え行動しても、学生というだけでこんなにも善良な私の意見は臨床の現場で通らないことがあったからだ。真実(マミ)同様、「なぜわかってもらえないの!」と心は怒ったが、その場では傲慢な私を押しさえ込んだ。では、善良であろうとする意味は何だったのか。波風を立てないように努力することは得意だったが、その結果、他人の期待に応え従うことが優先され、自分の意見は後回しになってしまった。しかし、本書を読んで、周囲の期待に応えることが自らの望みと共鳴しながら形成されてきたものかもしれないと考えるようになった。また、就職活動を前に「私の長所は何か」と尋ねると、周りは「人当たりが良い」と答える。私は思う、周りの人々は私の表面的な部分しか見ていない。だが、真実(マミ)との共感を通じて、表面的な善良さも自己表現の一部であったのだと受け入れることができるようになった。

そのため、私は自身が築き上げた善良な表面を活かしながら、大学教授になるために努力しようと思う。実務実習を通じて、薬学生として患者のためにできることは多くあっても権力がないため通用しないこともあるという現実を知った。だからこそ、信頼され通用する存在になるために努力したい、そして救える命を一人でも増やしたいと強く思っている。そのためには、単なる肩書きであっても必要な術を身につけておくべきだと考えた。…大学教授を選んだ理由も甚だ傲慢だ。

最後に厚かましいが、ヒロインの真実(マミ)にアドバイスをするならば、他人に期待しすぎず、自分自身に期待して生きること。これを胸に、極めて善良でありながらも傲慢な自分を生き抜いていきたい。これからは自分自身と向き合いながら、自分が本当にやりたいこと(真実[シンジツ])を見つける旅を続けていくつもりだ。

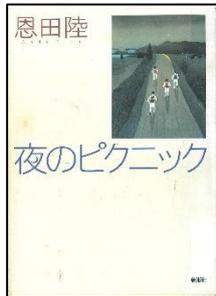
審査委員講評 田邊 良和 (学術情報課長)

「傲慢」と「善良」という言葉は、対義語ではないものの、相反する意味合いを持つことに私自身も考えさせられました。中川さんもまた、「傲慢」と「善良」の意味が交差する瞬間を経験されたのではないかと思います。

読書感想文の最後に、中川さんはヒロインの真実(マミ)に対して「他人に期待しすぎず、自分自身に期待して生きること」とアドバイスしています。実務実習の体験を通じて、「善良」だけでは時には無力感を感じることがある一方で、「傲慢」な部分も持ち合わせなければ、自分の夢を実現することは難しいと考えられたのではないのでしょうか。

誰もが持ち合わせている「傲慢」と「善良」。しかし、「傲慢」と「善良」の占める割合の違いから、その人オリジナルの味が出るのではないのでしょうか。自分自身の判断を信じ、そのバランス感覚を持ち合わせた立派な医療人になってほしいと心から願っています。

優秀賞（読書感想文の部）



一瞬一瞬を大切にすること

薬学部 薬学科 1年次生 千田 一乃

書名 夜のピクニック
編者 恩田 陸
出版社 新潮社

私は高校生のとき学校行事が少し苦手だった。なぜなら普段一緒に過ごしている友人だけでなく、校内の生徒全員が集まり、話したことのない生徒にも会って話さないといけないからだ。人混みが苦手なことと、少し人見知りである私は文化祭や体育祭などの行事はあまり楽しめなかった。

そんなとき私はこの本を手に取り初めて読んだときの衝撃を忘れない。

あらすじには「この学校には、修学旅行のかわりに、夜通し 80 km 歩く行事がある。そのなかで起こる青春模様を描いた小説」とある。私はこのあらすじを読んだとき、この本を読み切ろうか迷った。行事が苦手なことに加えて、高校時代、人間関係もうまくいかなかった私にとって非常に読む勇気がいる本だと思った。しかし、最初のページだけでも読んでみようと思って読んでみると止まらなかった。そしてこの本を読み終わった後、私は感動してしまった。それはこの作品が、普段話さない人と一緒に歩くことによって、自分自身が普段言わないような話をしたり、お互いのことを知ることができたりする日常のような非日常を描いていたからだ。

歩くだけなのに、普段学校の休み時間の中で適当に喋っているときには話さない本音がでてきてしまったり、生徒同士の関係や気持ちが変わっていきなり様子には心動かされてしまった。

この本に書かれている「夜通し 80 km 歩く行事」とは、「歩行祭」というものである。この行事の中で主人公は、ある賭けに出る。この賭けに出るといって自体が、歩行祭が生み出した特別な感情であり、みんなで夜を明かし、歩いてきたからこそ出てきた考えなのだろう。歩くだけなのにどうしてこんなにも特別な日のように感じるのか。私は読んでいて気持ちがだんだん高ぶっていくのを感じていた。

この本を読んでいく中でずっと思っていたことは、普段自分が何気なく過ごしている日常は振り返れば特別なものになっているのかもしれないということである。

「お前にはノイズにしか聞こえないだろうけど、このノイズが聞こえるのって、今だけだから、あとからテープを巻き戻して聞こうと思った時にはもう聞こえない。おまえ、いつか絶対、あの時間聞いておけばよかったって後悔する日が来ると思う」。このセリフを読んだとき、私は胸が締め付けられるような感覚がした。この本の舞台は高校である。つまり、高校生の時点でこの考えを持っているということである。私は驚きと同時に納得もした。高校時代に行事や人と関わることにに対して消極的だった自分にとって、このセリフは自分に言っているのではないかと感じたからだ。まだ 18 年しか生きていないが、もうすでに何かしらのタイミングを外したことは何回もあっただろうし、後悔していることも正直ある。でも終わって過ぎてしまったものは戻せない。だからこそ今流れているノイズを聞き逃さないように一つ一つの瞬間を自分の特別なものにしていこうと思った。これは著者の恩田さん自身が感じていることであり、読者の私たちに伝えたいことなのだろう。特別なものは寄ってくるのではなく、自分で見つけるものだというのをこの本から学んだ。

こんな前向きなことを思っている自分ができるのは、この本に出会ったおかげだと思っている。

もしかすると私は、本当はもっとあのときの行事を楽しみたかったのかもしれない。誰かと一緒に、青春をしたかったのかもしれない。そう思うと、嫌でしょうがなかった学校行事も、自分の青春の一部になるのかもしれない、とわくわくしてくる。

正直自分は学校行事を楽しめなかった人間なので、この本の登場人物たちのような体験はしたことがないし、共感できるかどうかとも怪しいと思っていたが、こんな自分だからこそ学ぶことが多かったし、もっと早くこの本に出会いたかったと思った。

私は「夜のピクニック」という素敵な本によって時間の大切さと特別なものは常に身近に潜んでいるということを知ることができた。

審査委員講評 石樽 康伸 (経済経営学部 マネジメント学科教授)

審査にあたり、私は文章力と要約力の他に、次のような基準を設けていた。読書感想文については、その本の内容をどれだけ自分に引き付けて書かれているか。書評については、逆にその本の内容をどれだけ客観的・批判的に評価できているか。そして両方に共通して、その本を他の人にも読んでもらいたいという思いがどれだけ伝わってくるのか、である。

この読書感想文の中で千田さんは、本書『夜のピクニック』の題材である「夜通し 80 km 歩く (高校) 行事」という「日常のような非日常」を追体験しながら、自身の高校時代の学校行事をふり返っている。さらにそこから、「今流れているノイズを聞き逃さないように一つ一つの瞬間を自分の特別なものにしていこう」というこの本のメッセージを読み取り、「特別なものは寄ってくるのではなくて、自分で見つけるものだ」と前向きな気持ちを新たにしている。

私が『夜のピクニック』を初めて読んだのは2006年であった。千田さんの読書感想文を読んで、20年近く経った今、もう一度読んでみたいという気持ちが沸き上がった。

先の審査基準と照らし、素晴らしい読書感想文であると思う。

優秀賞 (読書感想文の部)



自分の家族の物語

薬学部 薬学科 1年次生

森 瑞樹

書名 海見える理髪店
著者 荻原 浩
出版社 集英社

海見える理髪店、それは海辺の小さな町にある。店の前には赤、青、白三色の昔ながらの円柱看板が立っていて、店は時代遅れの外観をしているが、中に入ると整然とこぎれいにされている空間が広がっている。評判のこの店にやってきた筆者は普段の美容院と違い、久々に嗅ぐ蒸しタオルのにおいに昔行っていた床屋を懐かしんで、髪形をお任せするところからこの物語は始まる。その後店主は無駄のない動きで髪を整えながら徐々に饒舌になっていく。散髪されている際に客の椅子から見える鏡は置く場所や大きさを考慮されていて、いっばいに海が広がっている。やがて店主は自分の過去について語り始める。店主の生まれは東京で、代々床屋をやっている一家に三代目として生まれた。学校に通っていたころから店を手伝わせられ、床屋として生きていけるように育てられていたが、絵描きになりたい夢があった彼は一度美術学校への進学を希望する。しかし条件が合わず、転々としたのち、再び家に戻り、床掃除から床屋での修行をやり直すことになる。彼は十八になっていた。そして修行を再び始めてから二年、やっと店で隣に立てたと思ったとき、彼の父親はなくなってしまう。店を背負ったものの、客は遠のいてしまい、彼はようやく自ら特訓し始めるのである。そして数年後、ある髪形のカットがうまいことでひととき有名となり、ようやく彼の人生は軌道に乗り始めるのである。その後も人生に起きた経験や自身の家族を語りながら、彼は客としてやってきた筆者に人生での教訓を語り続けるのである。このあたりで不思議に思うだろう。彼はずっと散髪しながら筆者に話続けているのである。しかも、一方的に彼の人生についてを、だ。今の美容院でこのようにする美容師がいたら、きっと最低評価がついて、美容院に来てまでどうして美容師の人生の過去の話聞かないといけぬのかといわれるに違いない。ここで一つ言っておきたいが、筆者は一方的に話されているものの、定期的に「退屈ではありませんか」と聞かれていて、そのたびに首を横に振っているのである。そして店主はシャンプーを終え、最後のシェービングへと入る。その時、店主はあろうことか、過去に人を殺めたことがある、と筆者の喉元に剃刀を当てながら衝撃の告白をするのである。ここから急に物語は彼の人生の重みを帯びてくる。彼はなぜこの海辺の小さな町で、孤独に店をやっているのか。なぜこんな身の上話を店主はしているのか。筆者はどんな気持ちで聞いているのか。筆者と店主の関係とは…。想像もしないラストを迎えるのである。私が一番驚いたのは、

この物語はなんとたったの四五ページで語られているのである。そしてこの物語は最後の数ページを読むまで全く違う物語に感じられる。読み終わったときには、一人の床屋の店主の人生を経験してきたかのような気持ちになれるのは間違いない。きっと、これからの人生で大切にしたい人がふと頭によぎる、そんな物語となっている。

この本は短編小説が六編続いている。この六編はいずれも家族をモチーフにして書かれており、さまざまな人生や家族とのかかわりがとても現実的に書かれている。一本ごと読むごとにまるでその人の人生を歩んできたかのような実体験をすることができるような本となっている。私がおすすめしたいのは自分の立場や状況が変わったときや年齢を経たときに再び読むことだ。私がこの本に初めて出会ったのは父親を亡くし、心がすさんでいたときであった。家族を亡くした悲しみをどうしてよいかわからなくなっているときに読み、心を照らしてくれたこの本のことを私は一生忘れずに読み続けるであろう。この六編に書かれた家族はすべての物語が幸せなわけではない。しかし、読み続けていくうちに自然と読者自身が自分の家族について思いをはせるようになる。この本は大変な思い出も幸せな思い出もどちらもひっくるめて受け入れてくれる。そして自分がどう生きていきたいのか、自分の大切にしたい人との向き合い方を考えさせてくれる。そして自分の置かれている状況によって刺さる言葉が異なる、そんな本となっている。今のあなたに刺さる物語はいったいどの編で、どんな思いを感じるだろうか。この本を読んで読者はそれぞれ自分の家族に思いをはせて自身の家族の物語が出来上がる、そう感じられる短編集となっている。

審査委員講評 **大東 万里絵** (国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科准教授)

『海の見える理髪店』は、床屋の店主が客の髪を切りながら、鏡越しに自らの過去や経験を映し出しているような描写が印象的で、家族への後悔や取り戻せない時間への喪失感が深く伝わってくるような物語です。

森さんの読書感想文には、この物語を読んで感じた驚きや感動が的確に表現されており、作品の魅力がしっかりと伝わってきます。全六篇から成るこの短編集はどの作品も読者が家族に思いを馳せながら、自分の生き方や大切な人との向き合い方について考えさせられる内容であり、置かれた状況によって心に響く言葉は異なるものの、どんなときでも読者に寄り添ってくれる本だと述べています。この本を読み、家族との向き合い方を改めて考え直したいと思わせる、心に響く読書感想文でした。

優秀賞（読書感想文の部）



『アルジャーノンに花束を』を読んで

医療保健学部 理学療法学科 1年次生 **内江 健**

書名 アルジャーノンに花束を
著者 ダニエル・キイス
訳者 小尾 芙佐
出版社 早川書房

5がつ4にち

きょうわあるジャーのんにはなたばをのかんそうをかいてみようとおもう。

本書はこんな感じで、子どもが書いたような奇妙な文章で始まる。それもそのはず、主人公のチャーリー・ゴードンは知的障がい者で、32歳にもかかわらず幼児並みの知能しか持っていない。彼にはたくさんの友達がいって、皆彼を良くしてくれたものの、彼はずっと、母に喜ばれるために、平等になるために、頭がよくなりたかった。だからこそ懸命に努力するのだが、そう簡単に知能は上がらなかった。

そんな彼に、夢のような話が舞い込んでくる。手術によって頭がよくなるというのだ。その手術の信頼性は動物実験では実証されたものの（この動物実験の相手が「アルジャーノン」というネズミになる）、人間では未だ例がなかった。しかし、頭が良くなりたいたいという彼の意思で、彼が初めてこの手術を受けることになった。

その術前術後の経過報告が、本書「アルジャーノンに花束を」になる。実験の記録として、彼本人が日記形式で物語を時系列順に綴っていく。

初めは正直、読むのが億劫になる。誤字脱字が多く、句読点もめちゃくちゃで、読むペースが遅くなるからだ。しかし手術を終えると、徐々に文法が正しくなり、ついに彼はIQが180超の天才に変貌する。多言語を理解し、各学問領域をマスターするばかりか、自身を手術・実験していた精神科医や心理学部の教授らを知識量で凌駕する。

また、始めて「愛」や「性」を知る。「好き」という感情も、その早すぎる情緒的成長に戸惑いながら、様々なことを経験する。

しかし、彼はそんな頭脳を手にして、今まで良くしてくれていた友達が、実は自分を馬鹿にしていただけだという事に気付いてしまう。さらに、自分の家族ですら、自分が知的障がい者であるばかりに自らを見捨てたことを理解してしまう。

そんな人間の「悪」の感情に触れ、彼は純粋さ、素直さ、優しさを失う。反対に傲慢さが彼を支配する。得た知識と頭脳の代償は大きかった。

しかし、そんな彼の前に手術を受けたネズミ、「アルジャーノン」に異変が訪れた。徐々に知性が失われていくのだ。

彼はその頭脳で、この実験における欠陥に気づいてしまった。

「人為的に誘発された知能は、その増大量に比例する速度で低下する」

これが彼が出した結論だった。そう、彼のIQは徐々に低下していく。アルジャーノンは死んでしまった。そして、彼の経過報告はまた元のように戻っていく。天才だった頃の記憶はほぼ喪失、そして、好意を寄せていた彼女のことも忘れてしまった。しかし、最後に彼は「アルジャーノンのお墓にお花を添えてやって欲しい」という旨の文章を残している。

私はこの本を読んで、主人公のチャーリーのこの一連の経験は、何も特異なものではなくて、私たち現代人が一生をかけて経験するものだと思った。私たちは生まれ、成長し、そして老化していく。この一連の流れを、彼は手術によって短期間に詰め込んだのだ。

天才に変貌した彼が失ったものは純粋さ、優しさ。それは、得たその知能よりもずっと、ずっと大切なものだった。

私はこの感覚が物凄く分かる。受験戦争に参入し、高学歴を目指すのが善とされている現代社会。確かにその流れで私たちは微分積分が出来るようになり、英語を学び、地理歴史に詳しくなったのかもしれない。…しかし時々、これが何になるんだ、知識が多ければ、人間として優れているのか？と社会に呆れる自分に出会う。そんな私が羨望するのは、小学生だった頃、放課後友達の家に行き、時間の許す限りゲームや鬼ごっこを楽しんだあの日々だ。確かに私はその頃、今に比べれば世の中について何も分からなかったのかもしれない。それでも、あの頃の私は今よりも今日を楽しく生き、明日を楽しみにしていた。私は何を失ったのだろうか。私たちは何を失ったのだろうか。残念ながら、その過程を自らの記憶の中で正確に知ることは出来ないが、本書に綴られた経過報告でそれを垣間見ることは出来る。

そして、いつか私は、知能を失っていくだろう。それは私の祖母を見れば分かり切ったことだ。それでも、私はチャーリーのように他人を想う優しさを失わないでいたい。そして、友達を大切にしたい。

審査委員講評 **武本 眞清** (薬学部准教授)

何といっても書き出しが秀逸で、つかみは完璧である。読み手を惹きつけることと読書を体験させることの両者をさらっと同時にやるその発想には、正直恐れ入った。そしてつかみだけでなくその後の内容紹介にも引き込まれた。単に分かりやすいというだけでなく、主人公チャーリーの心理をも迎えるストーリーテリングは、あの短い文章でチャーリーに感情移入させるのに十分だった。

内江さんの感想を読んで真っ先に浮かんだのは、うちの子達の成長過程である。幼児期までは本当に無垢で可愛かったが、学校や友達といった社会に揉まれ、傷つく経験を通して純粋さを失ったことは、いつかそうなる覚悟はしていたものの心底寂しいものである。ただそれは誰もが通る道でもあるし、たくましさを身につけるための通過儀礼という気もする。そのうえで尚、優しくありたいうちの子達にも思ってもらいたいと、内江さんの感想文を読んで思った。

優秀賞（書評の部）



同鳴

国際コミュニケーション学部 心理社会学科 1 年次生

川口 万結

書名 52 ヘルツのクジラたち
著者 町田 そのこ
出版社 中央公論新社

この小説は、私の心の形を変化させる小説である。私はこの本を二度読みそのように感じた。最初は主人公の言いたくても言えない声ばかり読み取っていたが、二度目は、すべての登場人物たちの言いたかった声や、風景の描写、音の質感などに隠された自由への思いと、自分らしく生きたいと願う人たちの欲を感じることができた。そのため、私の心は一度として同じ形になることがなかった。

52 ヘルツのクジラは「世界でもっとも孤独なクジラ」とされ、他のクジラが聞き取れない周波数で鳴く世界で一頭だけのクジラのことである。本書は自分の人生を家族から奪われた女性・貴湖と、母から虐待を受け声が発せない少年・愛が出会い、二人を中心に自由な理想と現実の乖離に悩む者たちを描いており、誰にも聞えない声で鳴く52 ヘルツのクジラの孤独と、誰にも聞いてもらえなかった登場人物たちの孤独が重なり合う、魂の物語となっている。

この小説の魅力は二つある。第一に社会問題である虐待・ヤングケアラー・ジェンダー問題・認知症などを様々な角度から示唆していることである。登場人物はみな問題を抱えており、問題を持ちながらのひととのつながり方、自分の愛し方を、傷を負いながら追い求めている。特にトランスジェンダーであった岡田杏子の死に対して、貴湖の「他愛ない会話や、真夜中の電話。その何もかもに彼の叫びがあった。」という一文は、私の心の形を大きく歪めた。また、岡田杏子は気づいてほしいと願いながらも、気づくことによって関係が変わる恐怖から隠すしかなかったことが読み取れる。いかに恐怖が大きく、貴湖を愛していたのかがこの短くて繊細な表現の一文から伝わってくる。岡田杏子の苦しみと愛情の表現が、読者の心をひどく刺激しているのである。第二に「たち」の表現である。52 ヘルツのクジラは世界で一頭だけであり、ゆえに孤独であるが、題名では「52 ヘルツのクジラたち」と複数形にすることによって一人ではないという包容力がにじみ出ている。

そして私はある事に気づいた。それは愛という名の意味である。愛を数字に表すと104となる。この104という数字は、52と52が足されることによってできる数字であり、偶然にしてはできすぎているのではないだろうか。初めは孤独で、52 ヘルツのクジラからついた名で52と呼ばれていた愛が貴湖と出会い、ともに様々なことを乗り越えていくことによって群となす。孤独からの解放、つまり愛(104)になることができたのである。題名にある「たち」に込められた思いは、ただの二人だけで生きていくということの複数形だけではなく、孤独な52 ヘルツのクジラでも群をなすことができるという希望の意味が込められている。

生きとし生けるすべてのものが、心の中に52 ヘルツのクジラを飼っている。そのクジラは時間が経てば経つほど、どんどん成長していき、いつかは声を発しなくなるだろう。だから、あなたが殺し続けている思いを、なき叫んでほしい。あなたの声を出すためのきっかけは、この本がつくってくれる。ぜひ現代の混沌とし、人と違うことを言うと指をさされるこの世の中を生きるすべての人に読んで欲しい作品である。

審査委員講評 岡山 裕美 (医療保健学部 理学療法学科講師)

この書評は、『52 ヘルツのクジラたち』に対する深い洞察と情感豊かな評価が特徴的です。特に、作品を二度読むことで見えてきた新たな発見や、登場人物たちの隠された思いへの気づきが丁寧に描かれており、読者自身の心の変化を通じて作品の魅力を具体的に伝えていきます。「52 ヘルツのクジラ」の孤独を象徴として捉え、登場人物たちの孤独や苦しみとの重なりを指摘する点は鋭く、物語のテーマを的確に把握しています。また、社会問題を取り上げた部分では、虐待やジェンダー問題など多岐にわたるテーマが読者に与える影響を詳述し、岡田杏子のエピソードを挙げて、その短い表現の中に込められた痛切な感情を解釈しています。さらに、「52 ヘルツのクジラたち」というタイトルに込められた「たち」の意味を掘り下げ、孤独からの解放や群れをなす希望を読み取る独自の視点は斬新で、作品への新たな解釈を提示しています。数字「104」に関する分析や、孤独が愛へと変わる過程を考察する点も興味深いです。

◆◆ 第24回読書感想文・第6回書評コンクール受賞者からのコメント ◆◆

第24回読書感想文・第6回書評コンクールで、最優秀賞、優秀賞、佳作を受賞した15名から次のとおり受賞のコメントをいただきました。



最優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 6年次生 宮崎 琴音

最優秀賞を頂き大変光栄です。読書感想文コンクールには1年次から応募しており今回で6度目でしたが、1冊の本と向き合って自分の意見を表現できる得難い機会だったと思います。図書館の企画を通して本に触れることができ、自身の成長にも繋がりました。社会人になっても読書を通して自分の持っていなかった視点や知識を広げていきたいです。この度はありがとうございました。

(読んだ作品：『現代語訳 論語と算盤』 / 渋沢栄一著 / 守屋淳訳)



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 6年次生 越田 開成

数多くの作品の中から優秀賞に選んで頂き、ありがとうございます。
素晴らしい本を一冊読み終わった後の、残雪のような寂しさやふっと顔をあげて目に映る色を見つめなおしたくなるような、そんな名残が好きです。

(読んだ作品：『アルジャーノンに花束を』 / ダニエル・キイス著 / 小尾英佐訳)



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 5年次生 中川 さや華

この度は優秀賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。先輩方の卒業の年に、良い思い出ができたことを嬉しく思っております。私にとりましてこの賞は、これまでの22年を改めて振り返る貴重な機会となりました。薬学の道のりはまだ道半ばでございます。これからも夢のために尽力し、自分のやりたいことを見つける旅を続けようと思います。

(読んだ作品：『傲慢と善良』 / 辻村深月著)



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 千田 一乃

優秀賞を頂いて、光栄な気持ちと共に驚きがありました。文章を書くことが苦手な私にとって無縁な存在だと思っていましたが、自分の感想や気持ちを表現することは難しいことではないんだと気づきかけとなりました。これからも楽しく本を読んでいくことができたらいいなと思います。

(読んだ作品：『夜のピクニック』 / 恩田陸著)



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 森 瑞樹

この度は優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。選書した本は、「家族」をテーマにした本になっており、読む人、読む年齢によって、刺さる部分が異なる、共に成長できる本になっています。私はこの本を2、3度読み、毎回異なる視点や気持ちを理解できるようになった自身を鑑みると同時に、家族の形を客観的に知ることが出来ました。この本を通して、本を読む楽しさの一部を知り、自身の家族について考える時間を作ってもらえると嬉しいです。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

(読んだ作品：『海の見える理髪店』 / 荻原浩著)



優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部 理学療法学科 1年次生 内江 健

この度は優秀賞に選んでいただきありがとうございます。この作品は、知能や能力だけでは測れない人間の価値や、他者とのつながりの大切さを改めて考えさせられる内容となっています。ぜひ手に取って、その深いメッセージを感じてみてください。

(読んだ作品：『アルジャーノンに花束を』 / ダニエル・キイス著 / 小尾芙佐訳)



優秀賞（書評の部）

国際コミュニケーション学部 心理社会学科 1年次生 川口 万結

この度は、優秀賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。初めての書評でしたが、本と向き合う楽しさを改めて実感しました。拙い文章ながら、本の魅力が伝わっていれば嬉しいです。貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

(読んだ作品：『52 ヘルツのクジラたち』 / 町田そのこ著)



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 大廣 桃花

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。読書感想文を書くために足を運んだ書店で、なんとなく目を惹かれたのがこの本でした。このコンクールによって素敵な本に出会い、読書を始めてみようと思うことが出来ました。ありがとうございます。

(読んだ作品：『少年と犬』 / 馳星周著)



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 岡本 明花

この度は佳作に選んでいただきありがとうございました。今回この読書感想文を書いたことで同じ作品でも自分の変化によって感じるものが変わるということを改めて実感しました。これからも本を読む習慣を続けていきたいと思えます。

（読んだ作品：『走れメロス』 / 太宰治著）



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 高出 咲里

この度は佳作に選んでいただき、ありがとうございました。文章を書くことはあまり得意ではないですが、本を通して感じたことを言葉に表す楽しさを知れました。新たな視点を見つけられる読書をこれからも続けていきたいと思えます。ありがとうございました。

（読んだ作品：『六人の嘘つきな大学生』 / 浅倉秋成著）



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 手塚 心楼

この度は佳作に選んでいただきありがとうございました。普段あまり本を読みませんが、今回の読書感想文を通して自分が読みたい本を探し、人物の変化する感情を読み取る楽しさを改めて知りました。これをきっかけとして、読書をし、新たな考え方を取り入れたいと思えます。ありがとうございました。

（読んだ作品：『神様のカルテ』 / 夏川草介著）



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 宮坂 朋佳

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。読書感想文を書くにあたって、登場人物の内面を自分なりに読み取ることで私自身の内面と向き合うことができました。これからもこの本に限らず新たな価値観を求めて本を読み、自分の言葉で表現していきたいです。

（読んだ作品：『アトムの心臓：「ディア・ファミリー」23年間の記録』 / 清武英利著）



佳作（読書感想文の部）

経済経営学部 経済学科 1年次生

榊原 響輝

この度は佳作賞に選出していただきありがとうございます。まさか佳作に選出させていただけると思っていなかったので凄く驚きました。普段から読書をするほうではないのですが、今回の読書感想文をきっかけに読書に少し興味を持つことができました。読書にはその人の価値観を構築し、その人の行動に影響を与える力があると思いますので、自分も読書を通じて様々な価値観に触れ、より深みのある人間を目指そうと思います。

(読んだ作品：『永遠の0』 / 百田尚樹著)



佳作（読書感想文の部）

経済経営学部 マネジメント学科 3年次生

平 まつり

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。この本を通して、リーダーシップの取り方を学び、自分と向き合えることができ本当に良かったです。今後の学生生活に役立てていきたいです。

(読んだ作品：『リーダーは話し方が9割』 / 永松茂久著)



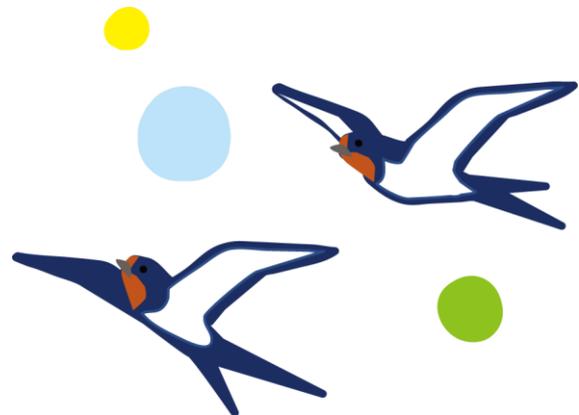
佳作（書評の部）

経済経営学部 マネジメント学科 1年次生

杉谷 日向

この度は佳作に選出させていただき、ありがとうございます。今回の読書感想文を経て、他者の視点から多くのことを学ぶことができ、読書することの大切さを改めて感じることができました。

(読んだ作品：『大谷翔平を追いかけて：番記者10年魂のノート』 / 柳原直之著)



◆◆ 寄 贈 図 書 ◆◆

大学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

自著		寄贈者
『立山地獄谷のあた討ち：十返舎一九『越中楯山幽霊邑讐討』を読む』	計1冊	福江 充 (国際コミュニケーション学部教授)
その他		寄贈者
『大辞林 第四版』	計1冊	泉 洋成 (理事)
『国際政治と進化政治学』他	計3冊	三浦 雅一 (理事・薬学部教授・地域連携センター長)
『Q&A対談 学生起業』	計5冊	森田 聡 (経済経営学部准教授)
『命の砦』他	計3冊	田邊 良和 (学術情報課長)



<編集後記>

今年度の読書感想文・書評コンクールでは、最優秀賞を受賞した宮崎琴音さんの『現代語訳論語と算盤』をはじめ、小説やビジネス書、エッセイなど幅広いジャンルからの応募がありました。その中でも人気のあった本は、優秀賞を受賞した学生も読んだダニエル・キイス著、小尾英佐訳『アルジャーノンに花束を』でした。また、人気のあった主な作家は東野圭吾さんや恩田陸さん、有川ひろさん(2019年2月に有川浩から改名)などでした。

読書は心の栄養とも言われています。次年度も幅広いジャンルから多くの作品の応募があることを期待しています。

北陸大学図書館報 NO.58 令和7年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850

Eメール：lib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/library/>

長期ビジョン 北陸大学 Vision50 (by2025) …… 2025年までに学生の成長力No.1の教育を実践する大学となる。